



熱き夏の陣の冒頭を飾るにふさわしいお題に
先輩TAさん大競演。全出走、8作品をお届けします。
覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

一番になりたい

赤い地面に引かれた白いラインの上に、緊張の面持ちで八人が並ぶ。僕はそのなかでも一番内側に立って、出番を待っていた。何が何でも、このリレーだけは勝つ——僕にはもう、この種目しかなかった。

自分で言うのもなんだが、僕は全国でも有数のスプリンターだ。大学だつて有力校から推薦がきている。勿論、だからといって練習を怠ったことなんてない。その成果か、ここ暫くは負けたことなんてなかったし、今回もそのつもりなんて全くなかった。だけど個人種目では、走らずして勝つ権利を手放してしまった。決勝まで進んだが、フライングを犯してしまったのだ。たまらなく悔しかったが、今まで共に練習してきた仲間たちが、全力で僕を支えてくれた。自分のことのうに悔しがってくれたし、この悔しさはリレーで晴らせばいい、と教えてくれた。だから僕は、リレーでの優勝を誓った。自分のためにも、みんなのためにも。

一番に出ていったのは、僕の隣の選手だった。僕と同じ、紫紺のユニフォームを着た仲間は、まだ少し後ろ。僕の全身を緊張と焦りが駆け抜けていった。僕の出番はまだか。そう思った次の瞬間だった。

「頼むぞ」「よしきた」

僕たちの間では、この会話だけで十分。別の選手と同時のスタートになったが、そんなことはお構いなし、一気に周囲を引き離していった。これで残るはあと一人。優勝に、手が届く。

コーナーを抜けて直線に入った。トップの選手はもう少し前、ライバルの背中が見える。いつもはここで大きく聞こえる歓声が、この時だけは、まったく聞けなかった。でも、そんなことは気にもならなかった。今はまだ、先頭に立てていないから。僕は一心不乱に走り続けた。

最後のコーナー。誰もが最後の力を振り絞る場所。僕もちろん例外ではない。いくら腕が悲鳴をあげようが、からださが苦しさを感じようが、そんなことで力を緩められる状況ではなかった。距離は確実に詰まってはいるが、まだとらえることができていない。最後の直線になっても、逆転できないでいた。もう駄目か。周囲はそう思ったかもしれない。でも僕は違う。優勝を誓ったから。みんなが一番になるって決めたから。負けるわけには、いかない。そこから僕は、もう一度伸びた。そしてゴールの直前で、最後の一人をかわした。

翌日、この優勝を世間は『青い光』の奇跡」と評した。でもこれは、奇跡なんかじゃない。仲間との地道な努力で掴んだ、最高の栄冠なのだ。

音読

どーでもいいお話なのですが、「日本一」のよみかたを答えてください。

さて、あなたは、どう読んだでしょうか。「にほんいち」？それとも、「につぼんいち」？自分でさっき書いておいてなんですが、どっちでもいいという話でも単純には行かないようです。というのも、世の中には面白いもので、「ラーメン日本一」「うなぎ日本一」「魚がし日本一」などという、日本一を（恐らく勝手に）冠したお店や、「株式会社日本一ソフトウエア」、もっとシンプルに「株式会社日本一」なる会社もあるのです。読み間違うときと怒られるでしょうし、なにより、失礼ですよ。少し前には、アナウンサーが「日本石油」か何かを読み間違えて、しきりに謝っていましたし。

で、さっきのお店や会社は、どう読むのかと申しますと、

- ・ラーメン「につぼんいち」、うなぎ「にほんいち」、魚がし「にほんいち」
- ・「につぼんいち」ソフトウエア、株式会社「にほんいち」

だあ、いったい、どっちやねん。大体、「日本」ってどう読むんじや！国の名前なのです。そう、自国語で国の名前がはつきりしていないわけがない。よし、調べてみよう。

と思って調べてみたのですが、なんと驚くことに決まっていませんでした。政府による正式な見解による、国の名前の読み方は決まっていらないそうです。よくよく考えれば対外的には「じゃばん」で済んでしまう訳で、そこまで深く考えなくてもいいのかもしれない。

ただ、決めようとしたことはあったそうです。昭和9年（1934年）旧文部省臨時国語調査会が呼称統一案として「につぼん」にすることを決議したのですが、結局、政府での採択には至らず、宙ぶらりんになったままになってしまったようです。

ということで、現在まで「日本」の読み方は「にほん」「につぼん」の両方があるということです。なんとということか……

でも、ここまでではあくまで「日本」の読み方のお話。「日本一」なら、話は別です。だって、東京にある「日本橋」は「にほんばし」としか読みません。「につぼんばし」なら大阪の地名ですから。こんな風に、なにか付けば読み方が決まってくる可能性があります。

実は、NHKでは、放送時に「にほん」「につぼん」の両方がバラバラだと混乱するので、ある程度の基準を定めています。

- 「にほん」 日本画、日本間、日本海など
- 「につぼん」 日本（国の名前）、日本国民、日本放送協会など
- 両方 日本時間、日本一など

実は、「日本一」の読み方についてはNHKでも決まっていらないようです。泣けてきますね。それでは、いったい会社の名前はどうか読めばいいのでしょうか。ここまで引つ張っておいてなんですが、会社の登記をする際には、名前はもちろん登録する必要があるのですが、読み方は登録する必要が全く無いのです。ということで、会社によっては、どっちか、決めていないところもあるのだそうです。

就職活動時に、「当社の名前ですが、口に出して言うただけですか」なんていわれたら大変です。決めている場合には絶対に間違えられません。きっちり調べておかないといけないですね。案外そういうところで面接をしているのかも。そんなわけは無いと信じたいですが、国の呼称が一つに定まっていらない国と言うのも全世界的に珍しく、実は、日本ただ一つ。読み方が二つある世界に唯一一つの国に住んでいる私達は表現の柔軟さ、という意味で幸せなのかもしれません。

一人暮らし＋一人暮らしⅡ

がらん、とした部屋を見つめて、なんだか2年前を思いだした。そう、2年前：私が生まれて初めての一人暮らしを始めた大学1年生の春のことを。

あのときも荷物が入る前は、なんて広い部屋なんだろうって思ったっけ。そう考えて1人で苦笑した。すぐに目一杯の荷物でこの部屋も狭くなるのにね。家具の配置も全部既に引越す屋に伝えてある。

2年前、あの部屋に入居したときはまさか2年で引越すことになるうとは思わなかったけれど。

つう、と壁を指でなぞった。白い壁。張り替えたばかりなのか、白い粉が指先に付いた。それを見て、隣にいた彼が言う。アスベストじゃねーの？　ちよつとやめてよ、と叩くと彼は笑った。

ああ、大学1年の、田舎から東京に出てきたときは、たった独りだった。誰も知り合いいなくて、昼間みんなでわいわい言うときは楽しくても、家に帰ればひとりぼっちだった。

彼がそばにいてくれるようになってから、私はもつと夜が嫌いになった。彼と会うときはどんな淋しさも感じないほど満たされるから、余計に、あの夜の静けさに吐き気がした。

おれ、実家を出ようと思うんだ。

彼がそう言ったのは大体1年前だろうか。私はふうん、と頷いた後、どの辺りに住むつもりなの？　と聞いた。学校のそば？

どこでもいい。だから、一緒に暮らそう。

インターホンがなって、引越す屋さんがやってきた。私の荷物と彼の荷物が運び込まれる。2人の、新しい生活のために。どうしてだろう、2年前一人暮らしを始めたときだったわくわくしたけれど、そのときよりずっと部屋がきらきらして見える。ほんとは理由はわかってる。あのときと違って、今は、左手から伝わる温かさがある。彼が隣にいる。家に帰っても、ひとりじゃない。

家具が一応伝えた通りに並べられ、こまごまとしたものが入った段ボールが積み上げられる。そうそう、これからが大変なんだよね。だけどきつと大丈夫。あのときみたいに1人で黙々と作業をするわけじゃないから。どんなことだって楽しくなる。

これからよろしく願います。

そう言って頭を下げると、彼は、何いきなり改まって　とちよつと笑ったあと、こちらこそよろしく　と言って深々とお辞儀した。

一本のスパゲティ

十一時半。時計から顔を上げてあたりを見回すけど、まだ彼の姿は見えない。あれ、あつてよね？ うん、約束は十一時半。大丈夫だいじょーぶ。

一週間前、ずっとただのクラスメートだった彼に好きだって言われて、そして今日、初デート。あーもう、自分の心臓がバクバクゆつてるのが嫌なほどわかる。どんな顔して会えばいいんだろう。てゆーか、彼にいつもどんな顔して会ってたんだっけ。

「ご、ごめん！」

聞き覚えのある声に顔をあげる。わ、今私絶対めちやくちやうれしそだった。いやいや、ここはちよつと怒らなくちや。遅刻してきたのは彼なんだから。

彼はごめんね、ともう一回言うのと、すまなさそうに頭を掻いた。

「おいしい店知ってるんだ。それで許して？」

もう、しょうがないな、なんて言ってみるけど、最初から怒ってないよ。来てくれただけでうれしいから。

「わ、きれい・・・」

思わずため息をもらす。この騒がしい街にこんなかわいいレストランがあつたなんて。

「ご予約の2名様でよろしいですか？」

店員の言葉に彼ははい、と返事をした。

「えっ、予約してくれたの？」

私の言葉に彼はちよつと顔を赤くして頷いた。う、うそ。いつも男子と楽しそうにはしゃいでるだけだった彼がそんな風に気を利かせてくれるなんて・・・

「・・・ありがと。」

彼はうれしそうに微笑んだ。

外のあの騒がしさが嘘のように店内は緩やかに時が過ぎていた。彼は落ち着いていて、そわそわしてる私の子供みたい。こうやって、男の人と2人でご飯食べるなんて初めて。しかも、それが、大好きな彼なんて。

「こちら、サーモンとアスパラのクリームソースのスパゲティでございます。」

いつの間にかやってきたウェ이터が、私の前につやつやしたスパゲティを置く。

「おいしそう！」

サーモンのピンクとアスパラのグリーンが春

っぽい。彼がおすすめて言ったから頼んだけど、大正解だったかも。

彼が頼んだスパゲティも来て、二人で同時にいただきます言った。いつもは気にしないけど、今日はスプーンまで使っておしとやかに食べてみる。彼もおいしいと呟きながら、スパゲティを口に運んでいく。

もう、なんでこんなに落ち着いているの。私はこんなに彼を気にして食べてるのに。彼は何を思ってたんでるんだろう。

(やべえ)

男の出身は信州。そばはすすめるもの。音を立ててこそ美学。初デートに見栄を張るのはよくあること。今の状況だけでなく、実は値段にもびびってる。一夜漬けのテブルマナーでだましましやってきた。脇の下がベチョベチョです。

普段は女よりも三度のそばを愛する男はスパゲッチの巻き加減なんてわかりません。拳が口にはいることだけが自慢の彼にとって巻き加減なんて関係ないはず。

だがしかし、これは初デート。緊張と恥じらいが彼を窮地に追いやった。普段の一割程度しかアゴに力が入らなかった。そして口からあふれる一本のメン。否、スパゲッチー。

噛むべきか、ススるべきか！

すすって汁が飛んだり、音が立ったらどうしよう。よし！噛もう。えっなぜか彼女がガン見！

四面楚歌とはこの事か！既に手遅れなのか！スパゲッチーって何なんだろう？

「そもそも、スパゲッティーとは、紐を意味するスパゲットから派生した言葉で、主に二ミリ程度の太さを呈している物を指します。日本には60年代後半に料理されるようになり、家庭でもよく調理されるようになりました。80年代までは定番のミートソースとナポリタンが主だったのですが、バブル期あたりからいわゆる『イタメシブーム』をきっかけとして、日本独自の和風味付けといった物が現れました。ちなみに、現在お出ししている料理は、店長オリジナルのソースを使った味付けでございます」

「Who?」

「ウェ이터ですが、何か？」

男はお辞儀をしてそとと去っていった。

1+1=2から学ばない

$$1+1=2$$

これは加法の演算を表す数式の中でもきわめて単純な数式である。
この数式が表す内容は誰にとっても当たり前であり、絶対的に正しいと思われることだろう。

しかし、数学的には、この数式も証明が必要であり、そして証明することが可能な命題なのである。

数学の基礎的な部分を完全に形式的に展開することを目指したアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドとバートランド・ラッセルは、自著「プリンキピア・マテマティカ」において約380ページを費やし、この数式の証明を記した。詳しいことはここには書けないが、彼らは数学を形式的な体系として捉えなおすと言うことを試み、その結果、このような誰もが当たり前と思う数式を理論的に証明すると言うことを成し遂げたのだ。

この「1+1=2を証明する」というのは極端な例ではあるのだが、私はここから、学問において専門的なことを勉強・研究する上での姿勢というものを学ぶべきではないかと考えた。

大学に入り、より専門的な学問の領域に入ると、日常生活的な「当たり前のこと」が当たり前でなくなるときが来ることもあるかもしれない。それは、当たり前のことだけでは物事を十分説明できなくなることかもしれないし、当たり前だと思っていたことそのものが間違っていたことに気づくことかもしれない。

そういう状況に立ったとき、我々はどうすべきなのか。当たり前だと思っていたことをもう一度客観的に見直し、誰もが納得できるように理論を構築することが必要なのである。

それはたった一つの数式を証明するために380ページも費やさなければならぬほど大変な作業かもしれないが、その作業があつてこそ、より洗練された学問の体系が生み出されることになるだろう。

スキキライ

少女は一週間ぶりに外に出た。外といっても、まだ病院の敷地内ではあったが。少女は、ゆっくりと辺りを見回した。たかが一週間ではあったが、外の変化には著しいものがあつた。花は咲き、木々は芽吹き、穏やかな春の景色がそこにはあつた。少女は、そんな春の様子を楽しむように、暖かな陽氣を楽しむように、ゆっくりと散歩をした。

ふと、少女はかがみこんだ。見ると少女の目の前には、一輪の花が咲いていた。春に似合つた、鮮やかな黄色い花だ。少女は花を摘んで、隣にあるベンチに座つた。

スキ、キライ、少女は小さな声を出しながら、手に持った花の花びらを、一枚一枚ちぎり始めた。誰かを思うようにゆっくりと、でもしっかりと。スキ、キライ、スキ、キライ、少女が小さな声を上げるたびに、花びらは減っていく。

花びらの枚数があと半分といったところから、少女の声は段々と細くなり、ついには聞こえなくなつてしまつた。それでも少女は、おそらくは心の中でまだ言い続けているのであろう、花びらをちぎる手を止めない。春風の、暖かく心地よい音だけが辺りを包む。

ふと、手が止まつた。見ると少女の手の中の茎の先には、花びらが一枚だけ残つていた。少女はその花びらをちぎろうとするも、何か思い悩んでいる様子であつた。誰を思っているのであろうか、何を思っているのであろうか。しばし少女はその花びらを、ちぎるかちぎるまいか悩んだ。少女はじっと、花びらを見つめ、結局ちぎらずに持つて帰つた。

少女が病室に戻つたその日の午後、同じ病院に入院している少年が、少女の部屋を訪れた。少女が少年に会うのも一週間ぶりである。たかが一週間ではあったが、久々に会つたせいとか、双方何となく緊張しているように見える。

少年は、手術成功してよかったな、もう大丈夫か、食欲あるか、等の少々ぶっきらぼうな、それでいて少女を気遣う言葉をかけた。少女はその言葉全てに、弱く微笑んで返した。饒舌な少年と寡黙な少女、対称的な二人の時間は、瞬く間に過ぎていった。

やがて日が沈み、また明日も来るからな、と言いながら少年が病室を去ろうとしたとき、少女は不意に少年を呼び止めた。少女は、花瓶の中の、花びらが一枚だけの花を手に取り、去り行く少年に向け、ちぎって、と小さく言つた。少年がよくわからないまま、言われた通りに、最後の一枚の花びらをちぎるのを確認すると、少女は、照れくさそうに下を向いて、でも明るく微笑んだ。

病気がちな少女の、決して届くことのない、不器用な恋の告白であつた。

私が一番

私は「前ならえ」をしたことがありませんでした。

まだ、幼稚園にも入っていないお子ちゃまでもなければ、海外生活で日本の風習に触れていないエリート感漂う帰国子女でもなく、ましてや外国人でもない。大和魂と大和撫子を愛する日本人です。

もしかしたら、この日本人古来のよさを愛しているのがいけなかったのかもしれない。

縄文時代の平均身長は156cmらしい。

よく言えば高機動。よく言えば回避率が高い。よく言えば隠密姓が高い。スパイゲームの主人公になれそうだ。

そう、私は**チビ**だ！何が悪い！学年でダントツだよ。あだ名はロー

ド・オブ・ザ・リングのせいで**ホビット**だよ！その前は**ピクミン**だよ。

ちくしょう。

それでも今日から高校一年生。身長も春休みの間に鍾乳洞が一年で成長するぐらいは伸びてるさ。期待(ウルトラクイズに勝つ確率くらい)と不安(ウルトラマンが勝つ確率くらい)を胸に、初めての整列。周りの巨人族に囲まれた私は、自分より小さい人を探す権利もあります。

そして、先生からの号令、「各自、自分なりに身長を考えて並ぶこと」。

もちろん、自分が小さいことはわかっています。ええ、どうせ私はチビですよ。言われなくても前に行くつもりですよ。

そして、巨人族を押し分け前に行くと、そこには伝説上のホビット族が！

お互いに目を丸くしました。

まさかこんなチビがいるなんて。可哀想。

自分のことを棚にあげて悲観する私。でも、相手も似たような表情。お互い、同じ種族におこる苦勞を相手にも感じたのでしょうか。

そして、問題の先頭決め。仁王立ちをする権利はどちらにあるのか。緊張の一瞬。

「ねえ、君の身長は？」「〇〇〇cmだよ」「いっしょ、いっしょ」「2cmサバを読んだのは言うまでもありません。きっと相手の申告も政治家の公約並みに嘘に決まっています。

その直後、先生が出席簿を二人の頭に「ゴン」とのせる。先生！身長に不安がある人にとって頭はデリケートなんです！

「よし」先生の息とともにアカデミー賞の授賞式なみの緊張の一瞬。

「お前、先頭な」

待ってください！再調査をお願いします！異議あり！私の一年が決まっています。

私の戦いはまだ終わらない。まずは後ろのお前から倒してやるからな！

慣れ親しんだ狭い玄関のドアを開け外へ出ると、初春独特の柔らかな空気が肌を包んだ。部屋の中を振り返り、忘れたものが無いか頭の中で確かめる。

「よし」

下駄箱の上の鍵を手にして一声、

「じゃあね。——いつてきます」

その言葉だけを、がらんとした、何も無いフローリングの上に投げ置いて、私はゆっくりとその小さなドアを開めた。

はじめの一步

「あらま、もう今日なんだねえ」

私から鍵を受け取った大家さんは、まずそう言った。私の部屋の三つ隣に住む彼女は、絵に描いたような「気さくなオバちゃん」で、今時煮物をおすそ分けしてくれるような人だ。

「どうだったかしら、こゝは」

いつもの笑顔。煮物の味と一緒に、とても優しい。土地に不慣れだった私に、全てを教えてくださいました大家さん。この八年間、払った家賃以上の何かを頂いたような気がする。

「最高でした。もっとここで暮らしたいくらいです」

冗談交じりにそう返すと、彼女はふふと小さく笑った。

そして、他愛も無い会話の最後に、力強い言葉をくれた。

「頑張りなさいよ。アンタならきっと大丈夫」

「はい」

その強さに負けないように、しっかりと頷く。

けれど、ちょうどだけ、涙を堪えるのが辛かった。

名残惜しくアパートを出て、最寄り駅へと向かう。時計を見ると、三時を少し回ったところ。待ち合わせは、駅に四時。それまでにもう一ヶ所、寄りたいところがあった。

大通りを少し外れる。狭い路地を抜けていった先、大家さんに教えてもらわなかったら、きっと出会わなかっただろう場所——その小さな小さな公園に、私は足を踏み入れた。

緑で囲まれた、一軒家ほどの空間の隅に、ボツリと置かれた一脚のベンチ。いつ、どんなときでも、優しく私を迎え入れてくれた、私だけのお気に入りの場所だ。

歩み寄って、ゆっくりと腰掛ける。背板がきい、と軋んで、いつも通り私を受け止めてくれた。陽だまりの真ん中で、ゆっくりと瞼を閉じる。大きく深呼吸すると、思い出が溢れた。

大学時代は、たくさんの遊びと少しの勉強。まだ大人になりにくなくて、どこか焦りながら、毎日遊んでいて。でも、やっぱり就職はしなくちゃいなくて、それから毎日働いて、忙しくて、悩みは尽きなくて。たまに恋もして、振られたり振ったりして、やがてアイツに出会って——プロポーズされて。上京して八年間、ここで一人で泣いたり笑ったり。嬉しいこ

とも悲しいことも、このベンチと一緒に飲み込んできた。

そして、そんな日々も、今日、終わる。

「じゃんけんぼん！」

子供の声に、瞼を開けた。ベンチとは反対側、小さなジャングルジムの前に数人の子供たちが集まっている。

「じゃあおまえ、オニな！」

一人の子が負けたらしい。その子を残して、他の子たちはジャングルジムから少し離れた場所まで、横一列に並んだ。リーダーらしい子が踵で地面に線を引き、大きな声で叫ぶ。

「ここがスタートラインな！」

私は時計に目を落とした。四時十分前。思ったよりも長い間、回想に耽っていたらしい。もう時間がない。後ろ髪引かれる思いでベンチから立ち上がると、公園の出口へと向かった。

「はじめのいっぽ！」

子供の無邪気な声に足を止める。振り返ると、ピタリと動きを止めた子供たちの姿。それぞれの歩幅分、スタートラインから離れている。スタートを切っている。

「初めの、一步」

呟いてみた。その言葉の持つイメージが、今の自分と合わない気がして、すこし寂しくなった。私はいつ、最初の一步を踏み出すのだろう。新しいスタートを切るのだろう。

駅に着くと、柱に寄りかかったアイツが、退屈そうに携帯をいじっていた。時計を見ると、四時を五分だけ過ぎていた。

「こめーん、遅れた」

「あ、よう。全然いいよ」

謝りながら駆け寄る私に気付いたアイツは、携帯をボタン、と閉じると、いつもの優しい微笑を私に向けた。うん、これから毎日これが見られると思うと、相当幸せかも知れない。

「さてと、行きますか」

「行きますか」

顔を見合せて笑い合う。そこで、ふと子供の声が蘇った。

『はじめのいっぽ！』

そうだ、いそ今やってしまおう。大家さんも、公園のベンチも、全部綺麗な思い出にして、大事に大事に取っておこう。

「ねーねー、ちょっとここに立ってみて」

「ん？」

「私が合図したら大きく一步跳んで」

「はあ？」

『何言ってるの？顔のアイツは無視して、私は元氣よく言う。』

「せーのっ、はじめのいっぽ！」

跳んだ。アイツも一緒に跳んでくれた。ちょっと遅れたけど。跳んだ後も、『何言ってるの？顔のままだろ？』

『始めの一步』これは始まりの一步だ。一人きりでベンチに座る日々はもう終わり。これからは二人で歩いていこう。

スタートラインはもう切った。あとは、オニならぬ幸せに触れていられるよう、一緒に頑張りましょうか、ダンナ様。

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	一番になりたい	7 pt	4 位	0 sp
		走り抜ける爽やかさ。さすがスポーツ物の王者です。一人称視点に徹したところが、テンション高く読めるポイントでしょう。 「バトン」には後輩への思いが託されているようで。 イチオシフレーズ：「僕たちの間では、この会話だけで十分」「奇跡なんかじゃない。」 「仲間との地道な努力で掴んだ、最高の栄冠なのだ。」		
A02	音読	26 pt	1 位	0 sp
		まずは読者を引き込んで、調査結果をとんとんとんと手際よく見せながら、どんどん読者を「どーでもよくない」気持ちに巻き込んでゆく。カタめの話題を読ませるワザは天下一品でございます。案の定の圧勝、おめでとさん。正統派コラムの王者として君臨した彼を超える新入生、来たれ！ イチオシフレーズ：「どーでもいいお話なのですが……」「だああ、いったい、どっちやねん。」×2 「大体、日本ってどう読むんじゃ！」		
A03	一人暮らし＋一人暮らし＝	15 pt	2 位	0 sp
		花のように、しあわせ満開。「一」をさりげなく散りばめた小ワザも春爛漫気分を盛り立てて、はじまりのファンファーレを聴く思いです。 他人のシアワセって自慢に聞こえて気持ちよく受け取れない場合が多いのですが、この作者さんの筆致は春の太陽のように、ほこほここちよく入ってくる。丸ゴチックフォントのおかげだけではない 共感力 発揮の秘密、どうか盗んでください。 イチオシフレーズ：「アスベストじゃねーの？」×2 「どこでもいい。だから 一緒に暮らそう。」×2 「これからよろしくお願いします。」		
A04	一本のスパゲティ	15 pt	2 位	0 sp
		「一本」足りなかったんです。みんなでがんばって書こうね、ってお約束したのに、七本しか集まらなかったんです。 でも負けない！ みんなで書きました。くるりくるりと文体が変わって受け継がれてゆくストーリー、楽しんでいたけたでしょうか。 イチオシフレーズ：「やべえ」×3 「脇の下がベチョベチョ」「噛むべきか、ススるべきか！」×2 「ウェイターですが、何か？」で、ネタ部分に押し上げられてイチオシ・フレーズ大賞受賞です。		

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	1+1=2から学ぶこと	3 pt	4 位	0 sp
		飾り気なくまっすぐに。少し見えはじめた「学問」というものの手触りを後輩に手渡したいアニキ気分と読みました。そうだね、世界の見方をひっくり返す、ってたぶんこんな感じ。 イチオシフレーズ：「380ページ」		
B02	スキキライ	14 pt	3 位	0 sp
		出ました秘蔵病院キャラ。どうぞ解釈はお好きなよーに。 イチオシフレーズ：「一週間ぶりに外に出た」「ちぎって」「ちぎって、と小さく言った」×2 「不器用な恋の告白」		
B03	私は一番	25 pt	1 位	0 sp
		一番なのに、ちっともうれしくないっ。そんな状況がコミカルにテンポ良く。自らの不幸をネタにして笑い飛ばす、まさに芸人の心意気。 イチオシフレーズ：「ちくしょう(小文字)」×5 「ウルトラクイズに～ウルトラマンが～」×2 「期待と不安」「学年でダントツだよ」「政治家の公約なみに嘘に決まっています」で、圧勝に加え、イチオシフレーズ大賞もさらいました。当然か。おめでとう！		
		18 pt	2 位	0 sp

B04	はじめの一步	おしまい、しっぽりと幸せを。 はじめの一步は、リスタートの合図。いろいろ今まであったけど、今ここから、新しく始まるのです。作者の性別なんて、カンケーないんだから！（きっと） イチオシフレーズ：「はじめのいーっぱ」×2 「私はいつ、最初の一步を踏み出すのだろう」「一緒に頑張りましょうか、ダンナ様」
-----	--------	---